

## 匈奴の城郭に就て

手塚隆義

### I

朝に穹廬を発すれば、暮には城郭に至る

とは、<sup>(1)</sup>後漢光武の初めに烏桓・匈奴が連合して、代郡以東を侵したときの記述である。穹廬と城郭とは、農耕と遊牧と云ふまったく異つた生活様式、ひいてはその上に立つ對蹠的な二つの世界をも表現している。

廬帳を居室として転移を常とする遊牧生活が、定居・固定的な城郭と本質的に相容れぬことは云ふまでも無い。主父偃は武帝に対し匈奴を伐つのを諫め李斯の言を引いて

匈奴は城郭の居・委積の守も無く、遷徙鳥鼠し、得てしかして制し難し

と云つてをり、外にも匈奴に関する文献はいづれも匈奴が城郭を有たぬ民であることを記している。<sup>(2)</sup>しかし、後世の突厥・回鶻、または吐蕃が、ある時期には城郭を築いた<sup>(4)</sup>ごとく、きわめて稀ではあるが、匈奴にも城郭の存した事実が認められる。その築城の由来と意義とを考察するのが本稿の目的である。ただ、ここに対象とした匈奴は後漢末より魏・晋にかけて衰頹すると共に次第に漢化して胡俗を喪失した匈奴では無く、北狄間の覇者として東アジア北部の諸族に君臨し、なほ南方の漢に対しても拮抗して譲らなかつた前漢代——B.C. 2.1 Century——の匈奴に就てである。

匈奴の城郭に就て（手塚隆義）

## II

匈奴に築かれた城郭としては、趙信城・范夫人城・衛律城の三城をあげることができる。衛律城は、この名称で呼ばれたとする確証は無いが、趙信城が築城者趙信の名を冠している——孟康曰、趙信所作、因以名城（漢書・匈奴・上の注）——ので、同じく築城者たる衛律の名を城名として、かく呼んでも大過無いであらう。

以上の三城の内、築城の由来その他を明かにすることができないのは范夫人城である。范夫人城は漢武帝征和三年（西暦前九〇年）に漢將李広利が匈奴を征し、夫羊句山の狭に要撃した右大都尉と衛律の率いる匈奴を破り、追跡して至つた城であるが、所在が漠北であること以外には由来を考察する一片の材料すら發見でき無い。後漢の応劭は遠く匈奴を征した漢將が築いたものとし、城が陥らんとした際にその妻が余衆を率いて完保したために、この名称を得たと解釋した、すなはち応劭説によれば、范夫人城は匈奴の城郭では無く、漢が塞外に築いたいはゆる外城の一つと考へられるのであるが、漢が受降城のごとき外城を築いた例はあるにせよ、范夫人城がかかる性質のものとする説明の拠りどころが明かでないばかりでなく、このような解釋の裏づけとなる歴史上の事実もよつたく存し無い。おそらく匈奴が本来城郭を有たないことより漢人の築城と推考し、塞外にある点より受降城のごとき外城と解し、城名より後の西域などに於ける漢將の活躍と同じような事件を想像したに過ぎないのではなからうか。なほ曹魏の張晏は「范氏は胡の諺を能くする者」と註し、築城者または居住者が范氏を姓とする胡巫、すなはち匈奴の Shamm、またはその關係者であつたと考へたようである。これに従へば応劭説とは異ひ范夫人城は、匈奴自身の築城にかゝるものとなる。呪詛は胡巫の重要な仕事の一つであり、それ故に匈奴社会で重きをなしたのであるが、范夫人城と胡巫との関連はまづ

たく不明である。したがつて応劭・張晏の註は、范夫人城の实体を解明する何らの手がかりとならないのである。

## III

趙信城・衛律城は——范夫人城も——いづれも Gol 以北に存在した。趙信城は郅居水の南、闐（寔）顔山に在つた、闐顔山とは抗愛山脈が南に延びて漠に没せんとするあたりを指したものであり、郅居水は Salang R. を呼んだものである。衛律城の所在も大体趙信城とはど遠からぬ場所であらう。また衛律の指導下にあつた匈奴が、漢の攻撃に対し奔走するために余吾水に架橋したことより、当時の匈奴の王庭および衛律城は余吾水の南にあつたとみるこ

とができる。余吾水は Orkhon R. と考へられる。<sup>(14)</sup> すなはち Orkhon R. 西南地域より北へ進めば郅居水 Salang R. に達し、やや東北に向へば余吾水 Orkhon R. を渡らねばならなかつたのである。漢武帝征和三年（西暦前九〇年）<sup>(15)</sup>、匈奴は漢軍の来襲を知り、これに備へて轡重を趙信城の北、郅居水 Salang R. に退避せしめ、戦鬪の累ひとなる人民は左賢王をして余吾水 Orkhon R. を渡つて逃れしめていた。<sup>(16)</sup> 左賢王が己れの住地である東北へ向うとすれば、当然 Orkhon R. を越へなければならなかつたのである。すなはち漠北に移つて後の匈奴の本拠は Salang, Orkhon 二水の間で、杭愛山脈の東麓一帯であり、單于の居処は Orkhon R. の上流域と考へられる。しかつて Salang R. が大体匈奴本拠の限界で、それより北は匈奴に服属していたとは云へ、堅昆 Kirghiz の住地であり、Salang R. 以南 Orkhon R. 流域の本拠が漢軍に蹂躪せられれば、匈奴は Salang R. を渡り、Tan-Nu Ra. を越へ Kem R. 上流、やうに Yenisei R. 上流の Minusinsk 地方まで、逃竄しなければならなかつたのである。征和三年（西暦前九〇年）<sup>(17)</sup> 匈奴の本拠を衝き、敗れ奔るのを急追した李広利は、たまたま本国で刑に触れた罪を大功を立てて贖はうとして Salang

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

二八

R. 以北に逃れた匈奴を索めて川を越へて軍を進めたが、やがて退いて南行し、燕然山に於て敗られ匈奴に降つてゐる。燕然山は眞顔山と同じく杭愛山脈の南端の山と考へられる。<sup>(16)</sup>

趙信も衛律も共に單于の幸臣として側近にあつた者である。したがつて彼等が築いた城郭が單于の居所・王庭、またはその極めて近距離な地点に築かれたと考へることは、当然であり、したがつて趙信・衛律の二城は、杭愛山脈の南端近く Orkhon R. の上流域に存したと考へて太過あるまい。

#### IV

趙信城の築城は、漢武帝元朔六年<sup>(西紀前一二三年)</sup>より元狩四年<sup>(西紀前一〇九年)</sup>の間のことであり、衛律城は漢昭帝始元四・五年<sup>(西紀前八三・八二年)</sup>頃のことである。<sup>(17)</sup>

趙信は元来、匈奴の相国の官にあつた匈奴人であつたが、動機は明かでは無いが武帝元光四年<sup>(西紀前一二三年)</sup>に漢に投降して河南省内黄に封地を与へられて翁侯に封じられた。<sup>(18)</sup> 漢は文帝以来、懷柔の目的で匈奴よりの投降を歓迎し、主なる者は封侯したのである。彼は漢武帝元朔二年<sup>(西紀前一二七年)</sup>に行はれた衛青の河南奪回戦に從軍し、軍功を以て益封せられたりした。<sup>(19)</sup> 投降した匈奴人は、もつぱら匈奴との戦鬪に從事せしめられたのである。元朔六年<sup>(西紀前一二三年)</sup>に同じく衛青の麾下として匈奴遠征に從ひ、伊邈斜單于の率いる強力な匈奴と出會ひ、全軍ほとんど殲没して誘はれるままに余騎八百と与に匈奴に降つた。<sup>(20)</sup> 彼は單于の姉を妻として与へられ自次干に任じられ、対漢策としてもつぱら匈奴の本拠を漠北に移し、南下して漢の塞に接近し紛擾を惹き起すことを避け、もし漢軍が漠を越へて遠征し来ればその罷勞の極まつた時を窺ひ攻勢にぞつて撃破することを刀説した。この建策は冒頓・老上の二單于の頃より漠南の陰山山脈附近

を本拠として漠を威圧していた匈奴にとつては劃期的な計画であるが、單于の容るところとなつて本拠は漠北に移された。<sup>(21)</sup>

しかし、漠北移遷も漢の攻勢を阻むことはできず元狩四年<sup>(西紀前一〇九年)</sup>には衛青・霍去病二將によつて、趙信の漢軍は容易に漠北に遠征し来らぬとする計の裏をかく大遠征が、二年前<sup>(西紀前一二一年)</sup>の霍去病の河西討伐による匈奴の西方勢力の掃討に續いて敢行せられた。ここに於て漠北の匈奴の本拠は衛青の率いる漢軍に蹂躪せられ、彼の築いた趙信城も一時占領せられた。その後しばらくは両国ともに戦ひに罷れ小康状態が続いたが、その間に趙信は和親を求める使者を漢に遣している。しかし漢は南越・朝鮮を征服し、更に対匈奴策の一環として匈奴の西隣の烏孫と同盟をはかり、漢女を烏孫王である昆莫に嫁せしめたので、匈奴も対抗策として急遽、女を昆莫の妻として遣している、おそらく趙信等の企てたものであらう。かくて趙信は元封四・五年<sup>(西紀前一一〇・一〇九年)</sup>の頃に歿した。<sup>(24)</sup>

衛律は、漢に降つて長水<sup>(西紀前八三・八二年)</sup>に住まはせられた匈奴人、いはゆる「長水の胡人」を父として漢地に生まれ成長したが、樂人李延年と交誼を結んだのが緒となつて武帝の信任を得るに至つた。<sup>(25)</sup> 李延年は倡であつたが音曲に秀でていたので武帝に用ひられ、さらに妹が寵せられて王子師<sup>(26)</sup>——後の昌邑王——を生むにおよんで益々重じられ協律都尉に任じられ、彼の兄弟である広利・季の二人も用ひられるに至つたものである。しかし、李夫人が早逝したために帝寵が弛み、末弟の季が後宮の女と乱したのに關連して延年も共に誅せられるに至つた。<sup>(27)</sup> 衛律はこのとき延年の推薦で使者として匈奴に趨ひていたが帰国してこれを知り、連累たることを怖れて父の故国匈奴に逃亡し降つた。武帝太初元・三年<sup>(西紀前一二・一〇四年)</sup>の間のことである。<sup>(28)</sup>

彼れが匈奴に降つて間も無く武帝太漢元年<sup>(西紀前一一〇年)</sup>に漢使蘇武が匈奴をおとづれたが、一行中の副使張勝が匈奴内

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

の陰謀に加担した事件が起り、且韃候單于より裁判を命じられ、成功はしなかつたが蘇武を匈奴に降らしめようと努力した。<sup>(29)</sup> 翌、天漢二年<sup>(西紀前九九年)</sup>、漢將李陵が匈奴に降り来つたが、己れが同じく降将である李緒と誤まれ、国にあつた妻子が刑せられたのを怒り李緒を刺殺した事件で、母闕氏の怨みをかゝ一時身を匿したが、やがて右校王に任じられると衛律は「靈王に任じられ、李陵が外事を担当したのに対して、ときには戦闘にも参加したが、専ら内事を受けもち大事ある」とに單于の顧問役をつとめた。<sup>(31)</sup> 征和三年<sup>(西紀前九〇年)</sup>には大宛征伐の勇將李広利が巫蠱の問題によつて匈奴に降り来り、狐鹿姑單于が勇名を慕つて己れの女を妻として与へ衛律の上位に置いて尊寵すると彼れは己れの寵が失はれるのを恐れ、胡巫をしてたまたま母闕氏の病んだのを、前に單于が李広利を虜とすれば刑し天を祀ると誓つたことに對する違約の祟りであると云はしめ、盟誓の履行を迫つてこれを除いた。<sup>(32)</sup> かくて衛律が漢にあつて榮達<sup>(33)</sup>の途をひらいた恩人の兄は、彼れの地位確保の犠牲となつて匈奴に刑死した。

昭帝始元元年<sup>(西紀前八六年)</sup>、執政霍光によつて李陵招還の使者として任立政が来ると、彼れは極力李陵に帰国を断念せしめるように努めた。<sup>(34)</sup> 翌、二年<sup>(西紀前八五年)</sup>、狐鹿姑單于が自子左谷蠡王が幼少であつたために、弟の右谷蠡王を次の單于に立てることを遺言して歿すると、衛律は左谷蠡王の生母である母闕氏の策謀に加担し、單于の遺命を矯めて貴人達を欺き、左谷蠡王を擁立して強韃候單于とした。しかし、これは單于たり得なかつた左賢王や右谷蠡王の離畔を招き、以前にも母闕氏は、夫である狐鹿姑單于の異母弟が國人に人望が厚かつたので、夫が己れの生子をさしおいて單于の位を譲るのを怖れて異母弟を殺害したことによつて同母兄達の怨みがかつており、しかも幼い單于を擁立して不正が多かつたので、匈奴国内は頗る不穩になつた。

ここに於て母闕氏の陰謀に加はつた衛律が最も警戒したのは、この混亂に乗じて漢軍が求征することであつた。し

たがつて彼れはつとめて漢に善意を示すかはら、求襲に備へて築城した。昭帝始元六年<sup>(西紀前八一年)</sup>に抑留していた漢使の蘇武・馬宏を送還したのも善意を示したものであり、翌々年元鳳二年<sup>(西紀前九九年)</sup>に漢の匈奴遠征軍の基地である受降城の附近に兵を配置したのは漢軍の動靜を偵察せしめるためであつた。さらにその上、余吾水に架橋して遁走の準備までした。<sup>(35)</sup> かくて、衛律は匈奴にあること二十四・五年にして昭帝元鳳二年<sup>(西紀前七九年)</sup>に歿した。

## V

いままで述べた趙信と衛律の経歴は、匈奴城郭の性格を窺ふ材料として不可欠のものである。まづ気づくことは、両人の経歴にすこぶる類似したものがあつたことである。両人は匈奴人または匈奴人の血統をひくものであり、ともに漢土に於ける生活の体験者である。

すなはち趙信は、漢に降つてより匈奴に復歸するまでの八年間を漢土に候として生活し、衛律に至つては漢に生まれ成長し、帝寵をほしいままにした李延年の友人として、おそらくは宮廷に出入したのであつて、ともに高度な漢の社会生活を体験した者であつたのである。そして共に匈奴に復歸または降つて後は、匈奴が彼等を歓迎した理由が、彼等の漢土に於て得た経験知識を生かして對漢方針を決定しようとするにあつたから、漢武帝の大攻勢に苦惱していた匈奴にとつては、尊重措くべからざる人物であつた。それであればこそ、かつて相国の卑官に過ぎなかつた趙信は<sup>(36)</sup> 一たび復歸すると單于の姉を妻として与へられ、自次王に任じられる寵遇をえたのである。自次王とは匈奴の常置の官では無く臨時に設けられたもので、單于の最高顧問をつとめたものであらう。<sup>(37)</sup> 衛律の場合は、匈奴の貴官にあつた者は、漢に降つて封侯せられているので、長水に集團生活を営ませられた彼れの父は匈奴にあつて決して身分官位の

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

三三

高い者では無い。しかも、その子たる衛律は、たび匈奴に降つて丁靈王に封じられ、单于の側近にあつて専ら国事を担当し尊重せられたのである。<sup>(38)</sup> しかも己れの競争相手たる李広利を計を以て殺し、单于の寵を独占し、さらに母闕氏の陰謀に加担して壹宿鞬单于の擁立に成功するにおよんで、匈奴国内に於ける彼れの勢力がいかに強まつたかは、けだし想像にあまりあるのである。

このように考へると趙信と衛律は、前者は西紀前二二二年より同一〇八・七年、後者は西紀前一〇四・三二二年の頃より同七九年にいたるまで匈奴にあつたので、兩人の匈奴に於ける活動時期は、わづかに趙信の死より衛律の投降し来るまで、すなはち西紀前一〇八年より同一〇四・三二二年頃に至る数年の間の空隙があるのみで、したがつて西紀前一二二三年より同七九年に至る約半世紀の間、匈奴は、の漢文化の体験者によつて指導せられたと云つても過言では無いのである。

趙信・衛律の匈奴で活躍した約半世紀は、匈奴は伊邈糾(B.C. 126—B.C. 114)烏維(B.C. 113—B.C. 105)烏師盧(B.C. 104—B.C. 103)句黎湖(B.C. 102—B.C. 101)且鞮侯(B.C. 100—B.C. 97)狐鹿姑(B.C. 95—B.C. 85)壹宿鞬(B.C. 84—B.C. 69)の七单于の代であるが、この時期にあたかも匈奴の国力が上昇期より下降期への転換期に相当する。すなはち、壹宿鞬单于の晩年には漢と烏孫とが協力して匈奴に攻め入り、この復讐のために宣帝本始三年(西紀前七一年)に起された匈奴の烏孫征伐は、大風雪のために惨憺たる結果となり、これが契機となつて冒頓单于の征服した諸族は離畔し匈奴瓦解の端緒となり、次の虚闐權渠单于(B.C. 68—B.C. 60)の代にも、宣帝地節二年(西紀前六八年)には大饑饉におそはれて人畜の半ば以上を失ふ打撃を受け、虚闐權渠の後を受けた握衍朶鞬单于(B.C. 60—B.C. 56)の代に至つて一族間に抗争がおこり分裂するに至るのである。したがつて趙信・衛律の匈奴を指導した時期は、壹宿鞬单于

の代に開始せられた漢の大攻勢による打撃を最少限にくひ止め、再び冒頓・老上二单于の黄金時代の再現を図るべき重大時期に当つたのである。

このような時期に、匈奴の重要な地位にあつた趙信と衛律の対漢方針は、前に述べたごとく極めて消極的・退嬰的な点に於て、一致していた。すなはち趙信は「ますます北のかた漢を度つて以て漢兵を誘ひ罷らし、極をもとめて之を取らん」ことを説いて本拠を漠北に移さしめ、衛律は終始和親の匈奴に利であることを主張して止まなかつた。<sup>(39)</sup>

匈奴の城郭は、このような心理の具体的な現はれとして、漠北に出現したのである。

## VI

城郭はもとより守勢のあらはれである。匈奴に対する遠征軍の基地として、遠く奥地に築かれないはゆる外城のごときは、やや積極的な性格を有つとも云へようが、城郭自体の本来の使命が防禦、すなはち退いて敵を迎へ堅守する、にあることは云ふまでも無い。

漢初には秦始皇が一統事業の完成のために六国の城を毀つたにもかゝらず、秦の後を受けた漢高祖が一部に封建の制を遺し、始めには功臣を後には一族をこれに代へて封じたために、多数の城が存した。劉氏一族の封じられた呉・蒼・楚の諸国は、それぞれ五十余・七十余・四十の城を有して王室の脅威となつたが、城郭の有つ軍事上の価値を遺憾無く發揮したのは、漢景帝三年(西紀前一五四)に起つた呉楚七国の乱に於てである。かねて叛乱に備へて皇子を封じておいた睢陽城(河南省商邱県)は、忽ち呉楚連合軍の包圍するところとなつたが、叛軍は意外の堅守に会つて攻略し得ず、この間に漢の戦備は整ひ得意とする騎兵は叛軍の脊後に長驅して糧道を絶つたために叛軍は全軍潰乱し、漢は最大の国難

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

三三

をからくも切りぬけたのである。この漢軍勝因の第一は誰錫城の堅守をあげねばならない。しかも、この事件は武帝即位前わずか十四年のことに過ぎない。したがって漢土にあった趙信や衛律が、この漢初の大事件を聞知しなかつた筈はない。しかも漢の最も国力の充実した武帝治世の前期に漢土に生活した両人が匈奴に降つて、漢の国力を熟知するが故に攻勢をとることの無謀を痛感するとともに消極策に傾き、かつて漢に在つたとき知つた城郭の軍事上の効果に、一途に頼らうと企てるに至つたことは至極當然なことと云はなくてはならない。ここに於て趙信は、漢が漠北に兵を送ることは困難であり、もし敢行しても軍士の疲勞と、輸送線が伸び補給に苦むこと、したがって長期に亘つて漠北に兵を留め得ないことは、匈奴の乗すべき点であつて、籠城してたゞさへ長途の遠征に困憊した漢軍を疲れせ、機をみて反撃し破ることこそ絶好の、むしろ唯一の戦法、と考へたのであらう。したがって趙信城は多量の穀を貯蔵し、<sup>(43)</sup>衛律城は穀を蔵するはもとより、欠水に備へて数百の井戸を穿つて長期の籠城の準備をしたのである。

このように考へると匈奴の城郭は、漢土の生活経験者によつてなされた浅薄なる漢文化の移植に止まつたと云へよう。衛律は城のまさに竣工せんとすると「漢兵、至るとも奈何ともする能はざらん」と豪語した、木を伐ること数千井戸を穿つこと数百におよんだ大工事……おそらくは事実より大げさに伝はつたかと考へられるが……であつた衛律城の有つ軍事力に対する信頼より發した言であらうが、それはとりもなはず漢文化に対する絶対的な信頼と解することができるのである。

もとより城を築き井戸を穿つた者は、投降・虜掠、その理由はともあれ、いづれも匈奴に居住した漢人であり、<sup>(46)</sup>衛律の共に城守すべく考へたのもいづれも漢人であつた。<sup>(47)</sup>したがつて匈奴の城郭は、築城の動機を始めとして、すべて匈奴内に存した漢的な要素の上に構成せられたものであつたと云ひ得るのである。

## VII

城郭は定着農耕生活の所産である。籠城に備へるためには、食糧として貯蔵する穀粟獲得を当然考へなければならぬ。趙信城には攻略した衛青が部下の將士に喰はせ、立去るにのぞんでなほ余りを焼き棄てたほどの粟を蔵して<sup>(48)</sup>いたし、衛律城も多量の穀を蔵していた。

匈奴が穀物の獲得を外部、とくに漢よりしようとするれば、漢朝よりの歳幣、すなはち贈遺・關市に於ける交易・奪略の三手段がある。贈遺は高祖七年<sup>(西紀前二〇〇年)</sup>に冒頓單于に敗れた漢高祖が、縮んだ和親条約の附帯条件の一項目として絮繒などと共に約せられたものであるが、武帝が和親を絶つてより中止せられた筈であり、漢と匈奴の交易機關であつた關市も、武帝元光六年<sup>(西紀前一三九年)</sup>には閉鎖せられてをり、最後の手段である奪略も漢の攻勢の前に漠北に移るほどであつたのでは思ふにまかせなかつた筈である。漢よりする以外にもとめれば文帝三年<sup>(西紀前一七七年)</sup>より支配していた西域諸国<sup>(50)</sup>よりの徵発であるが、この地域の国々の生活は狭小なオアシスに営む農業に依存しているのであつて、匈奴の隷屬下にあつたとは云へ、多量の穀物を遺るほどの余裕があつたとは考へられない。

匈奴が外部より粟穀を入手することが困難であつたとすれば、国内での生産を考へねばならない。米粟の美味を漢民族との接触に依つて知つた匈奴が、これを外に仰ぐのみに満足せず、たとへ国内の一部に於てであつたにせよ、農耕を行ふに至つたことは既に先学の指摘したごとくである。<sup>(51)</sup>すなはち武帝征和四年<sup>(西紀前八六年)</sup>匈奴では稼穀が実らず、これは漢將李広利を削した祟りであるとし、広利の靈を祭祀し慰めたことは、すでに匈奴に農耕の行はれた実証であるが、武帝元狩四年<sup>(西紀前一一九年)</sup>に衛青が攻略した趙信城が多量の穀を蔵していたことは、匈奴に於ける農耕開始の時期

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

三六

を少くも三十年廻らせて西紀前二世紀末と考へることができよう。匈奴にあつて農耕に従事したものは、虜略せられた田作の経験ある漢人、とくに匈奴の侵入の激しかった河北・山西方面の農民であつたろう。

すなはち趙信や衛律の築城の企ては、このとき匈奴国内の一部に農耕が行はれ、籠城の際の食糧としての穀物の入手にこと欠かなかつたことを前提としてなされたものである。しかし、もとよりそのみではなく、前にあげたごとく築城に際しては、たとへ専門の工人では無くとも、多少なりとも城郭のいかなるものかを知つた漢人、または穀を糧として長期の籠城に耐へ城郭での戦闘を行ひ得る漢人達、が多数匈奴国内にあつたことが、彼等をして漠北に城郭を建設せしめるに至つた動機であつたことは云ふまでもなからう。

## VIII

趙信・衛律の二城は共に、遂に軍事上の効力を充分發揮する機会無くして了つた。趙信城は勝ちに乗じた衛青の率いる漢軍に抵抗らしい抵抗もみせず占領せられ、城内に蓄積した粟は反つて漢軍に糧を提供する結果となり、衛律城はまさに竣功せんとして國人達より「匈奴人は城守に適さぬ」と反対せられて止んだ。前者の場合は、ゴビ沙漠縁辺に進んで漢軍を激へ撃つたが大敗して全軍潰乱し、伊達斜單子すら漢軍の包圍を破つて、わづかに数百騎を率いて遁走し、からくも激烈な漢軍の追跡より逃れたが、一時生死不明であつた程であつたので、したがつて匈奴は、潰乱の内に趙信城に拠つて態勢を立てなほす余裕などは無かつたかも知れないし、後者の場合は衛律が大閼氏の陰謀に加担し国内不安の因を作つた者であつたので、国内に敵が多かつたことは当然であり、かゝる人物が城郭を築き、しかも匈奴に居住した漢人を籠城の軍士として選んだことに對して、彼れに對する反対分子が有つた警戒危惧の念が一層

強まり、この反対となつたとも考へられる。匈奴が城郭によつての戦ひを得意とせぬことは云ふまでも無い。それ故に衛律は匈奴内の漢人を以て籠城の軍士に當てようとしたのであらうが、それに対して、匈奴人は城守に不適当云々の言は、この間の事情を物語るようである。

匈奴の城郭は、後世の遊牧民族が築いたそれのごとく、汗(單于)の宮殿でも官吏や貴族の住居でも、または隸屬民の工場・商業市場とか等の複雑な性格を有つものでも無く、築城者に漢土で経験した城郭生活を再現しようとする考へが多少あつたとしても、築城の主目的が軍事的なものであつたことは、云ふまでも無い。しかし優勢なれば鳥の集まるごとく不利なれば瓦解雲散して捕捉し難いのもつて漢を困憊せしめた匈奴が、城郭のごとき固定的な施設に依つて不得意な城守を企てるなど、たとへ實際に使用されたとしても不利は予想されなくてはならない。

しかし、いづれにせよ匈奴の城郭が永續しなかつた根本的な原因は、西紀前二世紀末・一世紀初め頃の匈奴が、たとへ国内の一部に農業が開始せられていたとは云つても、未だ本来の遊牧民族たる実体を純粹かつ鞏固に保持し、城郭のごとき漢文化の、換言すれば農耕定着文化の所産を、受け入れる下地が育成されていなかったところにあらう。したがつて匈奴の城郭は、たまたま漢文化に触れた・二の匈奴人の漢文化に對する心酔が、苦境を打開しようとする範余の一策として漠北に忽然として、出現せしめたに止まるのであつて、したがつて文字どりを沙上の樓閣にすぎなかつたのであり、ここに匈奴の城郭の決定的な運命があつた、と云うことができよう。

昭和二九・四・九稿

(註) 1) 後漢書・卷二一〇・烏桓

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

三七

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

三八

- (2) 漢書・卷八四・主父偃
- (3) 史記・卷一一〇・匈奴

逐水草遷徙、無常郭常処耕田之業

塩鉄論・論功第五二

大夫曰、匈奴無城郭之守、溝池之固、修戰備之用、倉廩府庫之積

- (4) 田坂興道博士「漢北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」(蒙古學報・第二号)
- (5) 漢書・卷九四上・匈奴

- (6) (8) 漢書・卷九四上・匈奴の註

- (7) 史記・卷一一〇・匈奴、卷一一一・公孫敖

- (9) 拙稿「胡巫考」(史苑・小林教授還曆記念史學論叢)

- (10) 閼顔山趙信城(史記・匈奴)、哀顔山趙信城(史記・衛將軍驍騎)

- (11) 丁謙氏「漢書匈奴伝上地理考証・卷上」

- (12) 駒井養明博士は、郅居水の南にあつた燕然山を肯特山に比定せられたがために、郅居水を Orkion R. を合せた Salanga R. の下流域を指すもの「前漢匈奴地名略攷」(史林・一五卷三号)とせられた。してみるとこのときの李広利の進路は著しく東北方になるので、むしろ Salanga R. の上流を呼んだものと考へられ、従つて郅居水より南して至つた燕然山も、丁謙氏のごとく杭愛山脈の南麓を指す(註11)ものと思はれる。

- (13) 註(5)に同じ。

- (14) 丁謙氏は翁金河に当て(註11)、駒井氏は Krailen R. とされた。「前漢匈奴地名略攷」しかし、翁金河とするとあまりに南方に過ぎよう、すなはち武帝元狩四年の烏青の遠征に対して匈奴は漠北に待ち受けて戦ひ、漢軍はこれを敗つて西北に二百余里追迹して寛顔山趙信城に達した(史記・匈奴)のであるから、このときの戦は沙漠の北の縁辺で行はれたのであらうし、翁金河とすれば単于の居処はその南としなければならぬことになる。漠北に居を移した後の匈奴の王庭としては、あまりに南に過ぎよう。Krailen R. とすると余吾水をあまりに東方とすることになり。元狩四年の遠征に漠北の匈奴の王庭を北西に予想し、霍去病を単于に当らしめんとしたが、虞の「単于、東せり」と云ふ言を信じて衛青と交代せしめ、去病は東北へ青は西北に進んだが、反つて青が単于と会戦し勝つて西北に進み、本拠を蹂躪するに至つたのである

- (15) 漢書・卷九四上・匈奴  
 単于聞漢兵大出、悉遣其輜重、徙趙信城、北歸郅居水、

- (16) 註(11)に同じ。

- (17) 趙信が匈奴に降つたのが武帝元朔六年 B.C. 123 であり、衛青に依つて趙信城が攻められたのが元狩四年 B.C. 119 であるから、築城の時期は当然この間のことである。衛律城は、昭帝始元二年 B.C. 85 に狐鹿姑単于の後嗣問題に關連して起つた匈奴の動搖に備へて、衛律が築城するに至つたのであるが、城がまさに竣工せんとして國人の反対を受け、廻ら更に謀つて漢に善意を示さんとして抑留していた蘇武等を送還するに至つた(漢書・匈奴)のであつて、蘇武が漢に帰つたのが昭帝始元六年 B.C. 81 であるから築城は始元四・五年 B.C. 83,2 のことと考へられる。

- (18) 史記・卷二〇・建元以來侯者年表、漢書・卷七・景武昭宣元成功臣表

- (19) 拙稿「漢武帝の匈奴懐柔と賈誼の新書」史苑・一〇卷・二号

- (20) 趙信が衛青の河南 Ordus 奪回戦に従軍した記事は無いが、元朔二年に衛青に屬して軍功を以つて益封せられている(史記・建元以來侯者年表、漢書・景武昭宣元成功臣表)ので、明かである。

- (21) 拙稿「前漢の投降胡騎に就いて」(蒙古・二号)

- (22) 史記・卷一一一・衛將軍驍騎

- (23) 史記・卷一一〇・匈奴

- (趙)信教單于、益北絶幕、以誘罷漢兵、微極而取之、勿近塞、單于從其計

- (24) 衛青の趙信城攻略、およびその後の漠と匈奴との交渉経過は、史記・匈奴伝に依る。

趙信の歿したのは、漢女細君が烏孫王昆莫に嫁した直後である。したがつて、彼の歿年を知るには、烏孫降嫁の年を考定することが必要である。しかし、其の年は史記に見えず、漢書・西域伝に元封中 B.C. 110-5 とあるのみである、張騫の生涯に就き精密なる研究をされた桑原隲藏博士も、細君の烏孫降嫁は既に騫の歿後のこととて漢書の元封年間との記載に従はれ、殊更に考証を試みてはおられぬ。「張騫の遠征」(東西交渉史論叢・五二頁)、前漢紀・西漢年紀ともに記すところが無いが、資治通鑑・卷二一は元封六年のこととし、徐松にいたつては元封の初めのこととしている。(漢書西域伝補匈奴の城郭に就て (手塚隆義))



匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

四〇

注・下)

この問題の根本資料たる史記・匈奴伝、および大宛伝とに依つてみると、匈奴伝では元封元年に武帝が朔方に幸して匈奴に武威を示した事の次ぎに、郭吉・王烏・揚信の匈奴遣使を述べ、続いて朝鮮四郡設置、酒泉郡設置、月氏・大夏との通商開始を記し、次に細君の烏孫降嫁、肢體に至るまで漢の塞の延長、趙信の死が記されている。それに続いて揚信の匈奴に使ひした疆末が記されているので、細君の烏孫降嫁や趙信の死は、上述のいくつかの事件とともに揚信の匈奴遣使の記事に夾まれて記されているのである。揚信に次いで王烏が使ひし、その答礼に匈奴の使者が長安に来つて病死するが、これが元封四年 B. C. 106 のことであり、朝鮮四郡設置はその前年の三年 B. C. 107 のことである。酒泉郡設置に至つては元封四年 B. C. 120 のことで誤入とみる外は無い。月氏・大夏に通じたとは、大宛伝の従来西方への往來を阻害していた姑師・樓蘭を趙破奴・王恢が征伐して、月氏や大夏への道を拓いた事件を指すのであらう。なほ、大宛伝では姑師・樓蘭征伐の次ぎに、その結果として酒泉郡まで築かれていた亭郭を燉煌附近まで延長した記事があるが、匈奴伝の酒泉郡設置の記事はこれに誤まられたものであらう。そして続いて、細君の烏孫降嫁が記されている。西漢年紀は趙破奴等の姑師・樓蘭征伐を元封元年 B. C. 110 に繫けている(卷一六)——これに続く細君降嫁の事件を元封の初めのこととした徐松の考への拠るところはこれであらうか。——しかし、これは王允謙の説のごとく誤りで、姑師・樓蘭征伐が元封三年 B. C. 108 のこと(漢書補注・卷五五・趙破奴)であるのは動かし難い。思ふに、姑師(車師 Tsurfan)征伐のときは、次ぎの細君の烏孫降嫁の事件とは無関係では無つたであらう。したがつて細君烏孫降嫁は元封の末、すなはち四・五年 B. C. 107, 6 のことと考へられる。また別の方面より、このことを考定したことがある。拙稿「烏孫の國內事情と西域都護の成立」(史苑・一四卷一號)したがつて趙信の歿年も、おそろしくこの頃と推考せられる。

- (25) 漢書・卷五四・李陵 「長水の胡人」に就ては、註(22)を参照。

- (26)(27) 史記・卷四九・外戚世家、同書・卷二五・佞幸

崔適氏は李延年の召貴せられたのを元鼎・元封の間 B. C. 116—B. C. 105 としている(史記探源・卷八)が、姉の李夫人の生んだ皇子諱が昌邑王に封じられたのは天漢四年 B. C. 97 である(漢書・卷一四・諸侯王表、同書・卷六三・武王子伝)であるから、大体正しいと考へる。したがつて衛律が延年の關係で用ひられたのも、この頃であらう。

- (28) 延年・季の誅せられたのは、広利が大宛遠征中のことである(史記・外戚世家)から衛律が匈奴に投降したのも、この時

期と考へることができよう。

- (29) 漢書・卷五四・蘇武

- (30) 征和三年 B. C. 86 には、右大都尉と共に李広利の軍を天羊旬山に邀へ撃つている。(漢書・匈奴上)

- (31) 漢書・卷五四・李陵

- (32) 漢書・卷九四上・匈奴

- (33) 彼は漢使任立政が李陵に帰國を勧める言をさへきり、賢者不独居一國、范蠡徧遊天下云々と云ひ、陵の歸心を讒へとしている。(漢書・李陵)

- (34) 漢書・匈奴・上

- (35) 衛律が匈奴に降つたのが武帝太初元——二年 B. C. 104, 3, 2 の頃のことであり、昭帝元鳳二年 B. C. 79 に歿したので、大体三十四・五年間は匈奴にあつたことになる。

- (36) 史記・匈奴伝には、匈奴の官号を記しているが、諸國は單于以下二十四の大諸侯の下に、それぞれ更に裨小王・封・都尉・当戸・且渠などと共に所屬するに過ぎ無い。なほ同書には趙信者、故胡小王とある。

- (37) 滝川龜太郎博士は匈奴語の音訳とし、正義の「尊重、單于に次ぐ」と云ふ解に反対せられている。(史記会注考証・卷一・〇・匈奴)けれど匈奴に於ては單于に次ぐ尊官として左・右賢王以下があり、自次王なる官が外には全く見当らぬのに依るのではなからうか。しかし、顔師古も正義の解に賛してをり、(漢書・卷九四上・匈奴の注)、やはり、与に漢を謀らん(史記・匈奴)とするあまり、尊重して設けた臨時の官で、單于に次ぐ尊官であつたらう。

- (38) 漢書補注・李陵

(衛) 律懼并誅、亡還降匈奴、匈奴當之「補注」先謙曰当云單于愛之也  
漢書・蘇武 衛律は自ら「單于の近臣」と称し、更に律前自漢歸匈奴、幸蒙大恩、賜号称王、擁衆數萬、馬畜彌山、富貴如此と云つてゐる。

- (39) (趙) 倍教單于、益北絶幕、以誘能漢兵、微服而取之(史記・匈奴)

- (40) 是時衛律以死、衛律在時、常言和親之利(漢書・匈奴・上)

- (41) 史記・卷一〇六・吳王濞

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

匈奴の城郭に就て (手塚隆義)

四二

(42) 天子与諸將議曰、翁侯趙信、為單于画計、當以爲漢兵不能度崑崙留 (漢書・衛將軍驍騎) 顏師古は輕留について謂漢兵輕入而久留と注している。

(43) 史記・衛將軍驍騎

(44)(45) 漢書・匈奴・上

(46) 日知錄集釈・卷二七

其言与秦人守者、匈奴以軼徒爲業、不習守禦、凡穿井築城之事、非秦人不能爲也

この秦人に就ては徐松が、案匈奴伝、衛律謀鑿城藏穀与秦人守之、亦以漢降匈奴者謂之秦人 (漢書西域伝補注・下) と云っている。

また、王国維氏は史記・大宛伝の大宛国で新に秦人を得て井を穿つたことに就き、井戸を掘穿する技術は西域に無く、これを知る者は漢人のみであり、大宛は漢人を得て始めて井を穿つたと説いている。(觀堂集林・卷二三・西域井渠考)。

これは西域にかぎらず蒙古に於ても云ひ得るであろう。

(47) 於是衛律為單于謀、穿井築城、治樓藏穀、与秦人守之

秦人の解は注(46)に同じ。

(48) 注(43)に同じ。

かつて趙信城に藏した多量の穀が、反つて漢軍に軍糧を提供する結果となつたことが、衛律城の場合に匈奴人の一是れ漢の糧を遺す云々 (漢書・匈奴・上) の反対となつたのであろう。

(49) 関市に就ては、拙稿「漢初匈奴との和親条約に関する二三の問題」(史苑・一五卷四号)

関市は武帝が元光二年 B.C. 133 に軍臣單于を計らうとして失敗した「馬邑の計」の後も繼續せられた (史記・匈奴) が、元光六年 B.C. 129 に漢の四將軍が一せいに関市の下に集つた匈奴を撃ち、兩國が正式に交戦状態に入るにおよんでは、当然続け得なくなり、閉鎖せられたと考へる。

(50) 冒頓單于が文帝に送つた書翰にこのことを報している。(史記・匈奴)

(51) 江上波夫博士「匈奴の飲食」(エウラシア古代北方文化)

(52) 松田寿男博士「匈奴の僮僕都尉と西域六国・一」(歴史教育・九卷五号)

(53) 史記・匈奴

(54) 朔方棄城、堅固固守、以待其衰、中國之所長、而戎狄之所短也 (後漢書・卷一九・南匈奴)

(55) 元代の蒙古人の和林城の属性として、岩佐精一郎博士があげられたところである。「元代の和林」(岩佐精一郎遺稿)

(57) 岩佐博士は漠北城郭の穀倉としての性格を重視され、趙信・衛律の二城もその目的で築かれたことを説かれている。「元代の和林」(岩佐精一郎遺稿) が、衛律城の場合には築城の動機より目的が明かであるし、趙信城の場合も趙信が漢軍を漠北に誘ひ罷劣を待つて撃破しようとする策の持主であつたのであるから、軍事上の目的と解される。多量の穀を藏したことは、むしろ軍事上の目的を達せんが為めと解される。

#### 【追記】

本論文の校正中に護雅夫氏の「南シベリヤにおける漢代の建築址」(北方文化研究報告・第十輯) が発表せられた、先きに別刷を項載した平井尚志氏の「フイニエイ河中流に遺る古代中國の住居址」(考古学雑誌・三七卷二号) と共に、頗る益するところが多かつた。また内田吟風氏の「匈奴における建造物」が同氏著の「匈奴史研究」に収められているのを知りつつ、怠慢の譏りを免れないが未だ同書に接する機会無くして本稿を草し了つた。